

喜びの果実

写真・文

津島修三

〈秋田市在住〉



思わず息をのんでしまった。
この神社の、社殿の壁のにぎやかさはどういふことだろう。

ここは、大仙市協和境の唐松神社。西暦〇82年の創建と伝えられる、秋田を代表する古社の一つだ。江戸時代の紀行家菅江真澄が文政9年(1826)に仙北地方の村々を巡ったときには、この神社について「安産の神で、祈るとその靈験は著しい」と記しているほどだから、いにしえから子授け、安産の神様として広く知れ渡っていたのだろう。この神社に由来する子授け安産祈願の唐松講は、今でも続けられている地域があるのではないだろうか。

秋田藩第三代藩主佐竹義処の息女久姫が難産の折り、この神社への祈願で無事男の子を出産した。以来、義処は唐松神社を藩内唯一の「女一代守神」と定めたのだ。

「当神社は子宝の神様として知られていますが、健康や良縁など、広く女性の幸福全般を見守る神様なのです。そのためか、他の神社が年配のお参り客が多い中、当神社ではむしろ、若いカップルや若い女性の方が非常に多く参られます」と、宮司の物部長仁さんはおっしゃる。

その中でもことに、子授けの靈験は並々ならぬものがあるらしい。写真に写っている色とりどりの棒状のものは、神社の拜殿で鈴を振る鈴緒を模したもので、この神社で子授けの祈願をして見事に子宝に恵まれた両親がお礼のお参り(お果たし参り)の折りに奉納していった手づくりのものだ。

写真左側の、一見ブドウの房のように見えるものにも注目していただきたい。よく見ると、これも全部鈴なのだ! もちろんこれらもお果たし参りの鈴。一番古いものは明治時代か、あるいはもっと古い時代か。何か、この小さな社殿の中に生命の息吹が溢れかえっているような感じがしないだろうか。どれだけ多くの親たちが新しい命の誕生を渴望し、どれだけ多くの親たちがその命の誕生に喜び浸ったか…。

とかく命が粗末にされがちな現代社会、唐松神社の社殿でこのような光景を目の当たりにすれば、もう一度命というものを見つめ直すいい機会になるのではないだろうか。

「唐松はフレンドリーな神様で、どなたでも自由に社殿に入ってお参りしていただけます」と物部宮司はおっしゃる。子供が欲しい夫婦はもちろん、良縁を求める女性、あるいは親子連れで一度唐松神社を訪れてみてはいかがだろうか。ちよつと幸せな気分になれるかもしれない。

宮司さんのお話では、東日本一円、首都圏あたりからのお参り客も珍しくないという。社殿には、結婚25年目に子宝に恵まれた夫婦のお果たし参りの鈴緒も、ひときわ喜びしげに下げられていた。